

1 国語教育研究部

部 長 梅葉 紳介
副部長 永田麻理子
副部長 永田 和輝

1 研究経過のあらまし

研究テーマ

豊かな言葉で、確かに伝え合う国語教育 ～指導と評価の一体化を通して～

中学校では、学習指導要領が改訂され2年目となる。『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 国語科』によれば、「主体的にとりくむ態度」の評価は、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面。②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面。という2つの側面を評価することが求められると、説明されている。

従来のように、提出物の状況や発表の回数等で評価するのではなく、実際の授業において、「粘り強い取組をしている態度」や「自らの学習を調整しようとする態度」をどのように見取り、評価していくことに難しさを感じるという声が多く聞かれた。

そこで、昨年度の小学校での実践と同様に、中学校での「主体的に取り組む態度」の評価を具体的にどのように行っていくかという提案をしたいと考え、実践を行った。

2 今年度のあゆみ

月日	曜	活動名	活動場所	活動内容
5/16	月	第1回推進委員会	小笠教育会館	本年度の活動方針について
7/4	月	第2回推進委員会	小笠教育会館	授業案検討
9/26	月	第3回推進委員会	小笠教育会館	授業案検討
10/17	月	第4回推進委員会	菊川西中	一斉研事後研打ち合わせ、zoom 配信準備
11/9	水	一斉研究報告会	菊川西中	公開授業、事後研究講話（常葉大学 中村孝一教授） zoom 配信・オンデマンド

3 一斉研究報告会

菊川市立菊川西中学校 山本 高裕教諭

よりよい中学校生活を提案しよう～データを引用して仮説を検証し、レポートを作ろう～
『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ「根拠を示して説明しよう」（中学校1年）

(1) 単元構想

本単元は、前半「読むこと」と後半「書くこと」の複合単元とした。単元前半の『言葉』をもつ鳥、シジュウカラの学習では、筆者がどのような事実を基に、どのような仮説を立てているか、文章をスライドに再構成することを通して、文章の構成と内容を捉えた。次に、仮説の検証について読み取り、筆者が行った実験や観察により、なぜ仮説が証明されたといえるか、話し合った。ここまでの学習で、仮説を立て⇒仮説を検証するための調査・実験等を行い⇒考察をするという文章の構成を学んだ。



単元後半は、前時までの既習をいかして、自分が中学校生活について調査したい課題についてレポート作成に取り組んだ。公開授業は、自分の設定した課題に対する調査結果をもとにした考察が適切であるかを、小グループでアドバイスし、よりよいレポート作成にいかすという授業を行った。

(2) 主体的に学習に取り組む態度の評価

文章の構成や展開を粘り強く考え、学習の見通しをもってよりよいレポートを作成しようとしている。

ア 単元全体を貫く評価⇒自己振り返りシート【ICT:Googleドキュメントの活用】

単元全体を通して、生徒の考えの変容や取組を見取るために活用。

イ 本時の評価 ⇒アドバイスを書いた付箋、作成レポート、自己振り返りシート

「調査した資料と考察につながりがあるのか。」という視点でアドバイスをしているか。また、友達からもらったアドバイスをいかして、自分の考察を修正したり、深めたりしようとしているかを評価。レポートは、変容がわかるように、コピーを作成するようにした。

【生徒の振り返りシート】

生徒A	実際に二人に話して、真逆な回答をされて違う考えがあると感じた。物事を多角的にみられるといいと思う。自分で思っていたことが、人から見たら違うと言われたので、これからは、たくさんの人の意見を参考にしたい。
生徒B	アンケート結果だけでもいいけど、資料も使ったり、ネットでも調べてみたりしたら？と言われて、アンケートで分かった結果とプラスするとより説得力の増すものになるなどと思った。説得力は、根拠に使うデータの量によって変わる。

本時の振り返りに対する評価は、以下のように考えた。

評価B	交流を通して、相手に伝わる倫理や根拠の選択についての工夫を考え、レポートを改善しようとしている。
評価A	評価Bの基準に加え、「多面的・多角的な視点に立っている」「多様な読み手を想定している」など、より発展的な工夫を考え、レポートを改善しようとしている。

生徒A、B共に、評価としては、「B」とした。

4 成果と今後の課題

【常葉大学教育学部 中村孝一教授からの御指導・講話より】

・アドバイスの視点を焦点化

お互いに異なる課題に取り組んでいるため、お互いの課題や調査、考察に対する理解が浅い。その段階では、深い学びまで到達するのは難しい。共通課題か個別課題か検討が必要。また、レポート下書き段階で、アンケート項目や調査母体数などについて指摘を受けても改善が困難。より前段階での検証が必要なものがあつた。そうすることで、本時の視点が焦点化され、自己調整がしやすくなる。

・自己調整する方法の学び

自己調整力とは、学んでいる自分をもう一人の自分が客観的に捉え、うまくいかなかったところはどこかを振り返り、自らの学びをコントロールする力。＝「メタ認知」

自己調整力を付けていくために、自己モニタリングの仕方を教え、繰り返し体験させることも大切。つまり、学び方を学んでいくことが必要だということ。授業の中で「さあ、振り返り書いて。」ではなく、「分からなかったことやできなかったことは何か。」「対話や意見交流、話し合いをしてよかったことは何か。」など振り返りの仕方を教えていく必要がある。

【事後研修より】

○子どもたちは、付箋のアドバイスをもとにレポートを修正しようという意欲があつた。

○「次は～したい。」という振り返りが書けている子がいた。自己調整力が感じられる。

△お互いにアドバイスをする交流中心の授業であつたが、「書くこと」の単元なので、文章の検討を授業で行ってもよかった。

△振り返りシートにも、振り返りの視点が必要。

△他教科に繋がる単元であるので、生徒会活動や総合的な学習の時間と結びつけて単元を組むと生徒により必要感がでてくるのではないか。

2 社会科教育研究部

部 長 岡田 智行

副部長 杉山 高久

副部長 角皆 智史

1 研究経過のあらまし

(1) 研究テーマ

社会的事象に主体的に向き合い、

よりよい社会のあり方を追究し創り上げていこうとする子どもの育成

(小)社会的事象を意欲的に追究し、自らと社会とのつながりを様々な見方からとらえ、よりよい社会のあり方を考えることができる力を育てる。

(中)広い視野に立って社会的事象を追究し、社会の一員としてよりよい社会の実現に向け、行動する力を育てる。

(2) テーマ設定の理由

社会科部では、静岡県教育研究会社会科教育研究部の研究テーマと同じく「社会的事象に主体的に向き合い、よりよい社会のあり方を追究し創り上げていこうとする子どもの育成」とし、新学習指導要領でねらう「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業を実践する必要があると考えた。児童・生徒が自ら考え、主体的に協働しながら活動し、学びを深めていくように、授業改善を目的として研究を進める。今年度は、研究テーマを実現するために、本研究部の活動方針を「①単元の展開の工夫」「②パフォーマンス評価の導入」「③多角的な見方から考える」とし、指導案検討や授業参観をすることで、小笠地区の社会科の授業向上を図っていくことを目指した。

2 今年度のあゆみ

活 動 名	実 施 日	内 容
第1回推進委員会	5月10日(火)	・研究テーマ、活動方針の決定・年間計画の作成
第2回推進委員会	7月4日(月)	・一斉研究報告会公開授業の授業案検討
第3回推進委員会(小)	8月4日(木)	・一斉研究報告会公開授業の授業案検討
(中)	9月12日(月)	・一斉研究報告会公開内容検討
第1回小笠榛原 合同推進委員会	9月29日(木)	・令和5年度静教研小笠榛原大会の打合せ
第4回推進委員会(中)	10月21日(金)	・一斉研究報告会公開授業の授業案検討
(小)	10月25日(火)	・一斉研究報告会公開内容検討
第5回推進委員会 一斉研究報告会 菊川市立内田小学校 掛川市立東中学校	11月9日(水)	(小学校)・公開授業 ・事後研修会 (中学校)・講話 ・学習会
第6回推進委員会	1月16日(月)	・本年度の成果と課題 ・次年度の研究推進の方向性について

3 一斉研究報告会

(1)公開授業(小学校)

ア 授業者・会場 神谷 耕平 教諭 菊川市立内田小学校 6年1組

イ 単元名・教材名 明治の新しい国づくり

ウ 本時の目標

明治政府の政策を確認したり、ダイヤモンドランキングを基にどうしたら欧米に追いつき、負けない国となるか考えたりする活動を通して、明治政府の政策の意図やそれによる世の中の様子の変化を理由に、作戦の優先順位を選択・判断することができる。(思考力・判断力・表現力)

エ 内容

子どもたちは、課題について自分たちで予想し、欧米に追いつき、負けない国となるための作戦を立て、明治政府の政策で欧米に負けない国となるのかを検証しながら学習を進めてきた。パフォーマンス課題を確認してから、ダイヤモンドランキングを基にどうしたら欧米に追いつき、負けない国となるか考えながら、グループで話し合った。多くの児童が明治政府の政策の意図やそれによる世の中の様子の変化を理由に、作戦の優先順位を選択・判断していた。

オ 事後研修

- ・話し合いの活動では、ダイヤモンドランキングを用いたことで、知識を関連させながら、話をしていった。「自分の考えを進んで伝えていた。優先順位の判断ができていた。自分の言葉で文が書けた。」ことから、B評価の児童が多く見られた。根拠をもとにして考えを伝え合ったり、まとめを書いたりすることができれば、A評価の児童が増えたと考えられる。
- ・パフォーマンス課題は、子どもたちは、ただ単に知識を学ぶのではなく、「政府の目線」として考えることで、イメージしやすくなった。調査官の立場を利用し、毎時間ふりかえることができれば、より効果のあるパフォーマンス課題になったと考えられる。

(2)講話・学習会(中学校)

ア 講師・会場 御前崎市教育委員会学校総務課 指導主事 澤入基裕・掛川市立東中学校

イ 講話 パフォーマンス課題を用いた単元構想づくりを中心に、今求められている社会科の授業について

ウ 学習会 単元を貫く課題を設定し、単元を通してつきたい資質・能力を明確にもった単元構想づくりを行った。前半の講話と関連づけて、単元の構想を具体的に練ることができた。他校の先生と意見交換することで、単元構想づくりにおける様々な考え方や視点に気づけたり、実際に行う授業のイメージが明確になったりした。タブレットの有効な活用方法についても話げできた。

4 成果と課題

「①単元の展開の工夫」「②パフォーマンス評価の導入」「③多角的な見方から考える」という活動方針のもとに、指導案づくりや単元構想づくりに取り組んだ。単元を通してつきたい資質・能力を明確にもった単元構想や対話を深めるための手立てなどについて話し合いをすることにより、社会科の見方や考え方を広げることに繋がった。今後も研究テーマ「社会的事象に主体的に向き合い、よりよい社会のあり方を追究し創り上げていこうとする子どもの育成」に向けて、追究していきたい。

3 数学教育研究部

部 長 柴田 勝明
副部長 齋藤 孝浩
副部長 坂部 暢之

1 研究経過のあらまし

静岡県数学教育研究部の研究テーマが、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力』を育む算数・数学教育」となり4年目となる。算数・数学科において特に大切にしたい資質・能力として以下の五つを挙げている。

- (1)きまりを見出す力 (2)理由を、筋道立てて説明する力
(3)別の(よりよい)方法を考えようとする態度 (4)統合的・発展的に考えようとする態度
(5)数学的に表現された文章・式・グラフ等を読み取り評価する力

県の研究テーマを受け、小笠地区でも研究テーマを「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力』を育む授業づくり」として4年目となる。思考力・判断力・表現力を具体的に表したものが先の五つの視点であり、これらの資質・能力の育成に重点を置いた授業づくりを研究してきた。今年度も新型コロナウイルスの影響が大きかったが、授業づくりに力を注ぎ、一斉研究報告会のもち方を更に工夫した。

2 今年度のあゆみ

(1) 研修会、会合

〈会場〉

期 日	会 合 名 ・ 活 動 名	内 容
5月10日(火)	第1回研究推進委員会〈教育会館〉	研究テーマ、活動方針、年間計画作成 一斉研会場、授業者の決定
6月21日(火)	第2回研究推進委員会〈教育会館〉	静教研夏季研究大会発表原稿の確認 一斉研の計画
7月12日(火)	第3回研究推進委員会〈教育会館〉	静教研夏季研究大会発表原稿の確認 一斉研について
8月3日(水)	静教研夏季研究志太大会 〈オンライン開催〉	栗林溪教諭による「生きてはたらく資質・能力を育成する授業」の発表
9月5日(月)	中学校部第4回研究推進委員会 〈教育会館〉	一斉研について 授業研授業案検討及び案内チラシの検討
9月16日(金)	小学校部第4回研究推進委員会 〈教育会館〉	一斉研について 授業案検討及び案内チラシの検討
10月4日(火)	小学校部第5回研究推進委員会 〈御前崎市立浜岡北小学校〉	授業参観 一斉研授業案検討及び役割確認
10月7日(金)	中学校部第5回研究推進委員会 〈教育会館〉	一斉研について 授業案検討及び役割確認
11月9日(水)	一斉研究報告会 〈浜岡北小学校・桜が丘中学校〉	小学校、中学校別々にリアル授業公開とオンライン視聴によるハイブリット研究報告会
1月12日(木)	第6回研究推進委員会	今年度の反省と来年度への申し送り事項

(2) 研究大会への参加(発表者として等)

ア 静教研数学教育研究部夏季研究志太大会に発表者として

御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中学校 栗林 溪 教諭

「生きてはたらく資質・能力を育成する授業～主体的な学びを育む工夫～」

3 主な活動…一斉研究報告会をリアル授業公開とオンライン視聴・参加のハイブリット型で小中別々に実施

(1) 小学校の部

- ア 授業者 御前崎市立浜岡北小学校 市瀬 太良 教諭
イ 学年・単元 5年「図形の面積」
ウ 実践

「台形の求積公式を導くこと」を目標においた授業実践を行った。①平行四辺形と三角形で学習のパターン化を図る工夫。②反転学習を単元の中に取り入れ、自分の考えを家庭でつくってくることで、話し合いの時間を多く取る工夫。以上の2点を取り入れることで1時間の中で台形の求積公式まで導くことをねらいとしていた。



(2) 中学校の部

- ア 授業者 掛川市立桜が丘中学校 石川 貴昭 教諭
イ 学年・単元 1年「比例と反比例」
ウ 実践

「日常の事象を比例の関係とみなせることを理解し、根拠をもって説明すること」を目標においた授業実践を行った。個別学習の後、小集団で話し合い活動をする中で、地震の初期微動継続時間と震源までの距離が比例関係にあることに気付かせ、ワークシートのデータ基に、震源の位置を特定し、説明することをねらいとしていた。



4 成果と今後の課題

(1) 小学校の部

反転学習を取り入れたことで、分かりやすい3つの台形の求め方をスムーズに取り上げられ、話し合いにつなげることができた。また、単元を意識した授業構想や単元を貫く課題が公式を導く必要感をもたせることにもつながり、提案性のある授業になったのではないと思う。

一方で、評価の在り方や適応問題については改善の余地がある。目標の意図や評価との整合性を図り、評価に合わせた適応問題はどうかを念頭に置き、授業研究を進めたい。

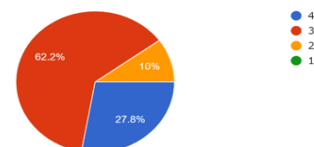
(2) 中学校の部

地図に円をかくことで震源の位置を見つけている、領域横断的に求めた生徒や、グラフ用紙を活用して比例関係を見つけた生徒の思考について議論が行われた。また、今回は必要なデータを取捨選択する力を付けるねらいで、意図的に「外れ値」となるデータを混ぜたり、比例関係や関数関係すらないデータを混ぜたりした。それが、本時の授業の目的を達成するための妨げになっている可能性もあった。目的による数値設定の重要性を考え、授業研究を進めたい。

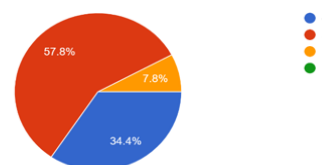
(3) 事後アンケートより

今回は、リアル授業参観とオンライン視聴・参加によるハイブリット型研究報告会という新たな形に挑戦したが、研修の満足度、研修の深まりのどちらも概ね高評価をいただいた。その理由として「実際に授業を見られる良さを改めて感じた」や「生徒のワークシートをオンラインにも映してくれて学びの思考が分かった」という意見が多かった。しかし一方で、音声の聞き取りづらさや事後研修におけるオンライン参加者が発言しづらい点などの課題も残ったので、来年度へつなげていきたい。新たな形による報告会へ御協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

今日の研修会の満足度を教えてください。
90件の回答



研修を深めることができましたか。
90件の回答



4 理科教育研究部

部長 横山 靖之
副部長 藤原 靖也 兼子 知也

1 研究経過のあらまし

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、そして、理科における「見方・考え方」を働かせた「資質・能力」の育成という視点から、今年度から「理科における探究の過程を大切にしていって、児童・生徒が主体的に問題解決する授業」をテーマとして研究に取り組んできた。

2 今年度のあゆみ

静教研夏季研究大会の第5分科会において、菊川東中学校の八木教諭が発表を行い、平成29年度から取り組んできた「科学的な見方や考え方を働かせて、主体的に自然と関わりながら問題解決する授業」の成果を示すことができた。本年度は、城北小学校を会場に、3年ぶりに集会形式で一斉研究報告会を実施し、「理科における問題解決の過程」を大切にすることについての共通理解を図ることができた。また、令和5年度に控える静教研夏季大会での発表の方向性についても理解を深めることができた。

県学生科学賞には、小学校42点、中学校17点、小・中合わせて59点の応募があった。小笠支部審査を通して児童生徒の理科研究についても理解を深めた。

第1回推進委員会【5月10日（火）小笠教育会館】・協会の活動について

第2回推進委員会【6月20日（月）小笠教育会館】・本年度の活動計画

第3回推進委員会【7月7日（木）小笠教育会館】・静教研発表検討

学生科学賞審査会 兼 第4回推進委員会【9月8日（木）小笠教育会館】

・学生科学賞審査 ・一斉研指導案検討

第5回推進委員会【10月20日（木）城北小学校】・一斉研指導案検討・会場確認

一斉研究報告会【11月9日（水）城北小学校】・公開授業 ・研究協議

第6回推進委員会【11月22日（火）小笠教育会館】・実践報告・本年度のまとめ

第7回推進委員会【1月24日（火）小笠教育会館】・次年度にむけて

3 一斉研究報告会

(1) 授業者・会場 内藤 一紀 教諭 掛川市立城北小学校 3年3組

(2) 単元名 じしゃくにつけよう

(3) 本時の目標

「海の生き物タッチ」ゲームで近づけた磁石と磁石や磁石と金属などの変化について、量的・関係的等の見方で比較することを通して、磁石の性質について追究していく問題をつくることができる。

(思考・判断表現)

(4) 授業概要

単元の第1次として、「海の生き物タッチゲーム」という体験的な活動を取り入れている。「同じ磁石なのにつかないのはなぜだろうか。」「磁石にはどんな物がつくのだろうか。」「磁石につけたクリップとクリップがつくのとはなぜか。」など、体験の中から疑問をもち表現することで、問題を見いだす力を付けることをねらいとした。

当日の授業では授業者のねらい通り、子どもたちから様々なつぶやきが見られた。活動時間が十分に確保されていたことも



あり、繰り返しタッチゲームを行い、主体的に取り組む姿勢が見られた。グループの友だちと「なんでだと思う。」「磁石の極がちがうのかも。」など、対話の中で問題を見いだしたり、予想をしたりする姿も見られた。

(5) 研究協議

ア グループ協議

○単元の導入として、体験や遊びの中から疑問が生まれているのがよかった。

○教材との出会いがよく考えられており、魅力的な活動となっていた。

○子どもたちから、予想を確かめたいという思いが伝わってくる。再現性もあり、主体的な学びに繋がる活動であった。

△個の疑問で終わってしまったため、今後の授業でどのように共有するかが大切である。疑問を言語化する手助けとして、実験の画像に書き込んだり、ワークシートでまとめたりする方法もある。

△評価が難しい。解決可能な疑問をもつことができることよりも、多くの疑問をもつことができた子が A 評価でよかったかもしれない。



イ 指導助言（御前崎小学校 河合 伸昭 教頭）

本授業では、問題を見いだすという問題解決の力の育成を目的に行われている。第3学年という、はじめて理科という教科が始まった児童たちにとって、難しい課題ではあるが、授業者の教材や発問の投げかけがよく考えられている授業であった。

実験の時間は十分確保されており、多くの疑問が子どもたちから生まれた。しかし、磁石のもつ4つの性質にせまる疑問を見いだすまでには至らなかった。本時ですべての性質の疑問をねらうべきなのか、単元の進行に合わせて1つずつ確認していくべきなのか、教師の発問は疑問に結びつくものであったかなど考慮する余地もあった。

4 成果と課題

本年度から研究テーマが変わり、「理科における問題解決の過程」の出発点である、「問題の把握・設定」に重点を置いて授業を進めたときの効果について考えてきた。

一斉研の授業を通して、「問題の把握・設定」の段階では、児童の体験や、知識のベースをそろえること、最後のゴールを示すことができるものであったことが、子どもの興味とやる気につながった。また、推進委員の授業研究からは、児童生徒にとって、身近な物で、その単元でやることにつながるものになっていると、その後の過程につながっていくことが分かった。上記の点に留意して「問題の把握・設定」の場面を扱うことで、「自分の見つけた疑問を自分で解決したい」という児童・生徒の意欲がうまれた。そのことが、単元を通して児童・生徒が主体的に問題解決に取り組む姿につながった。

今後は、その他の段階について、どのように授業を進めていけばいいか、その後の過程にどうつながっていくかについて研修を深めていく。特に、「予想・仮設の設定」の段階に重点をおいて授業をした時の効果について、考えていきたい。

5 音楽教育研究部

部長 仁平美和子
副部長 齊藤 昇
副部長 増田 琴美

1 研究経過のあらまし

新型コロナウイルス感染症の拡大により、もっとも影響の大きかった教科が音楽である。音楽教育研究部では、研究テーマを「音でつなごう ときめきの心」とし、資質・能力を育む音楽授業の在り方について、小中の系統性に着目して研究を行うと同時に、「新しい生活様式」下の音楽授業の在り方を模索してきた。

今年度は、社会全体がWITHコロナへと舵を切る中、音楽教育研究部としても、小笠地区の教員に還元できる内容に取り組みたいと考え、研究を進めてきた。

2 今年度のあゆみ

活動名	期日と会場	研修内容等
第1回研究委員会	5月10日(火) 小笠教育会館	・研究テーマ、研究方針の決定 ・年間計画作成、研究組織づくり
第2回研究委員会	6月30日(木) 小笠教育会館	・校種別研修「新しい生活様式」下の音楽実践 ・一斉研究報告会について
第3回研究委員会	8月30日(火) 小笠教育会館	・NPO法人掛川文化クラブ報告 ・一斉研究報告会について 授業づくりの課題 ・静教研下田大会報告 ・音楽授業と著作権について
静教研音楽部報原稿作成	浜岡中学校	・横山教諭の実践 「一人一台端末利用を通して広がる授業の形」
第4回研究委員会	10月4日(火) 掛川市立西中学校	・一斉研について
会場リハーサル	11月7日(月) 掛川市立西中学校	・音響、機材の確認 ・接続リハーサル等
第5回研究委員会	1月下旬を予定	・静教研部会報告 ・本年度の総括と来年度の方向性

3 一斉研究報告会

- (1)期日 11月9日(水)
- (2)会場 掛川市立西中学校 体育館
- (3)講師 師範授業及び講話 杉田 純子先生(合唱指導者 中央区立宇佐美学園)
- (4)対象 掛川西中学校2年6組生徒 齋藤昇教諭(音楽担当)及び参加教員
- (5)内容

ア 研究会のねらい

研究委員会にて、「歌唱共通教材」の扱いについて話題になった。小学校でも中学校でも共通して悩みがあることがわかり、今年度は「歌唱共通教材」の導入部分に焦点をあてて研修を行うことにした。

また、技術面の指導にとどまらず、児童生徒の人間性・学びに向かう力に働きかける御指導で定評のある杉田純子先生に講師を依頼した。



イ 当日の様子

授業では、曲の出会わせ方から、生徒が歌えるようになるまでの指導過程を学ぶことができた。その指導過程において、生徒が意欲的に取り組めるような工夫や、音楽的な見方・考え方を働かせるための手だてを知ることができた。

教員対象の講習会では、実際に歌いながら、児童生徒が音楽的な見方、考え方を働かせながら意欲的に取り組める仕掛けを学ぶことができた。

4 成果と今後の課題

音楽部報に掲載する横山教諭の実践は、コンピテンシーベースの音楽科授業づくりにおける一人一台端末の可能性を開く価値ある内容であった。この実践を元に小笠地区内でさらに研究を広げていきたい。

一斉研究報告会では3年越しに講師をお招きし、感染防止に配慮しながらも合唱の授業や実技講習が実施できた。WITHコロナで進めていく音楽授業研究として、大きな一歩であった。また、歌唱共通教材を対象にしたことで、小中学校どちらの教員も同じ視点で研修を深め、自分の授業での活動イメージが持てる内容であった。

講師の先生の具体的な声掛けや手法、指導の流れと生徒の変容がよくわかり、参加した教員には大変好評であった。講師の声掛けは音楽の授業にとどまらず、すべての授業に共通したものであり、参加者の授業力に資する内容であった。

メインの歌唱教材は中学校のものだったので、小学生を対象にした指導や表現を深める指導も見かけたという意見が上がった。今後も小中学校の研究委員が集まる場を生かして9年間の学びの連続性という視点からも校種を超えた有意義な学びができるよう、研修内容のさらなる充実を図っていきたい。

6 美術科教育研究部

部長 城下 俊介
副部長 萩田 昌人
副部長 高林 由季
文責 大和田貴宏

1. 研究経過のあらまし

美術教育研究部では、「アートの中で響いて広がり、かかわる・つながる造形教育」をテーマに研究活動を推進してきた。

本年度の活動方針として、第一に人やものなど生活や社会、美術や美術文化の中で造形的な見方・考え方を発揮していける造形教育、第二に今まで学んだこと（既習事項）とつながり構造化・概念化を捉え、生活・社会の中で造形的な見方・考え方を発揮していける造形教育を研究と実践の柱とした。

2. 今年度のあゆみ

- | | | |
|------------------------|----------|------------|
| (1) 第1回研究推進委員会 | 5月16日(月) | 小笠教育会館 |
| (2) 第2回研究推進委員会 | 6月16日(木) | 小笠教育会館 |
| (3) 第3回研究推進委員会 | 8月10日(水) | 小笠教育会館 |
| (4) 第4回研究推進委員会 | 9月26日(月) | 小笠教育会館 |
| (5) 第5回研究推進委員会・一斉研究報告会 | 11月9日(水) | 菊川市立菊川西中学校 |

3. 一斉研究報告会

(1) 日時 令和4年11月9日(水)

(2) 会場 菊川市立菊川西中学校

(3) 授業

ア 授業者 稲森 仁

イ 学年 中学校1年生

ウ 題材名 「神様召喚」

エ 題材目標

(ア) 何気ない日常の学校風景から神様を想像し、生徒が考えた神様の性格や役割などをもとに、主題を設定し、その姿を幅広い視点で表現することができる。(思考力・判断力・表現力)

(イ) 神様の体の形や扱う素材、色や模様などに造形的視点を働かせて意図的に表現し、制作することができる。(知識及び技能)

(ウ) 日常の学校風景を自分たちの想像力によって今までとは違った視点で捉えなおす制作や鑑賞活動を通して、自分の考えたことを具現化する喜びや、お互いの感性を尊重し合う態度を養い、豊かな情操を培うことができる。(学びに向かう力、人間性等)

オ 本時の目標

・お互いの作品を鑑賞、作者の意図と工夫を照らし合わせながら話し合いすることで、自分とは違った視点の良さを感じ取ったり、互いの発想を尊重し合ったり、造形的な視点への理解を深めたりすることができる。(思考力・判断力・表現力)

ケ 授業の概要

本時の授業で話し合い活動が始まると積極的に自分の作品について語る姿や友人の作品の色や形の意味について活発に伝え、聞き合う姿が見られた。

授業の導入では、他の学級の生徒の作品をTVモニターに提示して「この神様はどんな神？」と授業者が問いかけると「地面に種を植える神」など想像力豊かな意見が出て、色や形など造

形上の特徴と写真で表現された周囲の風景から作者の意図を探り、作品に込められたストーリーを想像していくという本時の活動の流れを全体で共有した。

小集団での鑑賞活動においては「力比べをしている神様だから強そうな色にした。オレンジは力強い感じがする。」「壁を食べる神様だから食べた分だけ徐々に体が白くなっていく。」「臆病な雰囲気を出したいから目を小さくした。」など、自分ならではのイメージや造形的な見方・考え方を働かせて自らの作品を友人たちに解説する姿が印象的であった。作品の背景となる校内の風景写真にも生徒たちの工夫が随所に表れており、壁のヒビや地面の苔、コンセントの穴などの何気ない日常のひとコマにオリジナルの物語を見出す遊び心が見て取れ、自分ならではの造形的な見方・考え方を働かせたものであったといえる。

また、生徒の意欲を高めるための授業者の工夫も数多く見られ「神様召喚」と銘打って作品を並べる台を畳や魔方陣を模したものや Google スライドのコメント機能を利用して互いに SNS 感覚で作品に対してのコメントを贈り合うなど中学生が楽しみながら学びを深めていくための手立ての充実した授業であった。

多くの生徒が自分の作品に愛着をもっている様子を感じられ、自分だけの一体を生き生きと紹介している姿が印象的だった。表現や鑑賞活動の楽しさを感じることができ、授業者と生徒たちのよい関係性が覗える、有意義な授業であった。

事後研修においては、本時の授業について研究推進委員による活発な意見交換がなされた。本研究部のテーマである造形的な見方・考え方の育成のために授業者の様々な手立てがどのように有効に働いたかを振り返るとともに、若干の課題点についても討議を行った。また、本年度は新規採用者も研究報告会に参加したことで、先輩教員の授業実践を間近で見るとともに、多くの美術科教師と意見交換し美術科における資質・能力を育成するための手立てや実践例について知ることのできる貴重な機会となった。

4. 成果と今後の課題

自分の作品の思いや考えを発表する生徒とそれを予想する周りの生徒との小集団活動が大変魅力的な授業である。見方・考え方については、これからの美術教育には大変重要な意味がある分野である。地域社会に発信していく図工・美術は、今後の小笠の教育にとっての方向性が見えた結果となった。

今後はこれらを踏まえ、継続して研究を推進していくことが大切である。



7 保健体育科教育研究部

部 長 永井 和典
副部長 村田 智
副部長 岡本 慎也

1 研究経過のあらまし

小中共同領域での実践、思考力・判断力・表現力等を養うための指導方法や評価のあり方の研究を継続的に取り組むことを基本として、研究テーマ「主体的・対話的で深い学びを通して、豊かなスポーツライフを実現する基礎を培う体育・保健体育の授業」を設定し、研究や実践を行っている。昨年度は小笠地区の一斉研は開催されなかったが、研究委員の実践を協議し、成果と課題を共有したり授業改善につなげたりすることができた。

「GIGA スクール構想による1人1台のICT端末」が各学校に整備され、保健体育科においても、授業のねらい達成のためにICTをどのように活用すればよいのか協議を重ねてきた。今年度は、マット運動を題材に伊久美大輔教諭が授業実践を行った。思考力・判断力・表現力を育むことを重点項目とし、小笠地区全体にフィードバックすることにした。一斉研を通じて授業実践について共有したり、小笠教育研究協会のホームページや本冊子『小笠の教育』にまとめたりして、小笠地区全体で共有しようと努めた。

2 今年度のあゆみ

活 動 名	実 施 日	内 容
第1回推進委員会	5月16日(月)	研究活動計画
第2回推進委員会	6月30日(木)	一斉研内容検討、授業案検討
第3回推進委員会	9月2日(金)	授業案検討
第4回推進委員会	9月16日(金)	授業案検討、一斉研当日の動きについて
第5回推進委員会	10月20日(木)	授業実践
第6回推進委員会	10月31日(月)	一斉研当日の動きについて
一斉研究報告会	11月9日(水)	授業報告、実技研修
第7回推進委員会	11月24日(木)	小笠の教育原稿検討、次年度の計画

3 一斉研究報告会

(1) 研究委員による実践報告

静岡県教育研究会保健体育教育研究部の授業づくりの視点に沿って実践を行った。

～授業づくりの5つの視点～（静教研）

1. 体を動かす楽しさや心地よさを味わうことができるようにすること
2. 全ての児童・生徒が、楽しく安心して運動に取り組むことができ、その結果として体力の向上につなげることができるようにすること
3. 発達の段階に合わせて、多様な運動経験を確保すること
4. 課題の解決に向けて、主体的・対話的で深い学びを大切にすること
5. 目標の達成に向けて、何をどのように指導するかを明確にした単元構成をすること

第6学年1組 「マット運動」 伊久美大輔（御前崎市立御前崎小学校）

『自分の課題とする技を練習し、組み合わせ技のレベルを上げよう』

視点4：課題の解決に向けて、主体的・対話的で深い学びを大切にすること

(ア)ほんの少しの成長でも認め合える集団づくり

体を動かす楽しさや、できるようになったときの喜びを感じさせることを意識

して授業実践を行った。見学者を含め、毎時間互いに補助をしたりアドバイスをしたり、小集団活動を取り入れたりした。技の発表会では、「最初は～だったけど、〇〇練習を通して、◎◎ができるようになりました。」等、一人一人プレゼンをする場を設定し、学び方や過程を自他ともに認め合える集団づくりを目指した。



(イ) ICT 機器を活用し、自分の演技を分析（メタ認知）

小集団で互いの演技や動画を見合ったり、Jamboard を使ってコマ撮りされたお手本動画に自分の課題を付箋として貼り付けたりすることで、課題の明確化を図った。また、Google Document で作成したワークシートを配信し、自己の課題や成長など、文字を色分けしながら入力させることによって、支援や評価に役立てた。

(ウ) 「する」「知る」「みる」「支える」活動を取り入れる

動画で自分の演技をじっくり観察して振り返りを書かせたり、「NHK for school」などの動画サイトを紹介したりすることによって、児童の意欲向上につなげた。

(2) カワイ体育教室による実技研修

教員の指導力向上を目指し、体育科授業のマット運動における練習方法や補助の仕方についての実技研修を行った。①笹舟や背倒立といった、マット運動の基礎となる補助的運動、②前転、後転の手の着き方など基本的な技術、③各発展技とそれにつながる補助的運動、といった流れで研修が進められた。

前方倒立回転跳びの指導では、「ホップ」「手を着く位置」「着手の瞬間」「空中局面」「着地」に分け、それぞれの局面でのポイントや、成功につながる補助的運動について指導をいただいた。場づくりの工夫や補助法についても、授業に取り入れていきたいと思うものばかりであった。

特に、苦手意識をもっている児童生徒に対してどんなアプローチをすればいいのか、技の前段階で楽しく意欲的に取り組めるようなリズム体操なども紹介していただき、大変参考になる研修会となった。



4 成果と今後の課題

- 技能の向上や、対話や思考を促すための効果的な ICT 活用ができていた。自分の演技を動画で見たり、教師に提出したりすることによって、自己の課題の明確化と、教師も児童の課題を把握でき、支援や評価につなげることができた。
- 苦手な児童生徒でも取り組みやすい体操や補助的運動、技の発展に向けた場づくりの工夫や補助法を具体的に知ることができた。また、実際に体験することにより、児童生徒のつまずき等の予測もできた。
- 推進委員会の中で、スポーツと多様な関わり方を取り入れた授業について協議することで、教師が児童生徒の成長を見取る視点や、意欲を高める工夫等について考えることができた。
- 一斉研の開催により、研究の成果や授業実践の共有、情報交換をすることができた。
- ▲ICT に関して、1 台端末での活用が多すぎたため、情報が混雑した。
- ▲児童が見つけたポイントや工夫をもっと全体でシェアするべきだった。
- ▲学校の授業では教師は一人、技能レベルや体格にも差がある集団という状況の中で、今回の研修内容をどう効果的に組み込んでいくか、考えていかなければならない。